

令和5年度 自己評価表

様式3

中長期目標 (学校ビジョン)		多様な価値観を尊重し、主体的に生きる力を育み、持続可能な地域を創造する人財の育成を図る。		今年度の 重点目標		1 主体的に取り組む態度・思考力・実践力の育成 2 他者を認め、人とながる力の育成 3 地域を知り、地域に参画、寄与しようとする力の育成 4 働き方改革の推進		
							鳥取県立米子西高等学校	
年 度 当 初							最 終 評 価 結 果(2月)	
評価項目	評価の具体項目	現状(R4年度の状況)	目標(R5年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
1 主体的に 取り組む態 度、思考力 の育成	授業改革の推 進	・1年次生では、意欲的に学習に取り組んでいると答えた生徒は93%であった。 ・1年次生では、朝の連絡やその他の情報共有を日常的にClassroomで発信した。 ・コロナ感染拡大でリモート授業や生徒が対面カリモートを選ぶハイブリット授業を実施したところ、リモート選択者が多かった。 ・授業での活用頻度はまだ高くないものの、アクティブラーニング推進研究授業で、授業の中でのChromebook活用事例を研修した。	・授業研究会の質的向上とICTの活用を推進し、授業スキルの向上を図り、主体的・意欲的に学びに取り組んでいると答える生徒が90%以上になる。 ・Chromebookを活用した授業が実施されている。	・ICTの授業利用を効果的に活用するために、教科内の情報共有を推進する。 ・ハイブリッド授業では、教材の持ち帰り、リモート参加者の指定方法、双方向の授業参加などの徹底等ルール作りを行う。 ・効果的なChromebook活用法を教員間で共有できる機会を作る。 ・生徒の創造性や論理的思考力を養うための研修会等を開催する。 ・授業アンケートを実施し、自らの授業を振り返り、授業力の向上を図る。	・1・2年次生では、各教科でchromebookを活用した授業を実施されており、生徒は概ねchromebookを準備して授業に臨んでいた。 ・3年次生では、教材や進度の工夫を行い、放課後講習の時期や教科、放課後の自習スペースの確保、模試の受け方など、授業以外にも学力向上の工夫をした。 ・全教科でICT機器を活用したA L型の研究授業を実施した。 ・学校評価アンケートで、主体的・意欲的に学びに取り組んでいると答えた生徒は、84.9%で目標を下回った。 ・臨時休業時、全学年でリモート授業を実施することができた。	C	・授業アンケートを継続して実施し、chromebookを活用した授業研究を進め、授業改善を推進する。 ・急な臨時休業にスムーズに対応できるように、一定のルールを作り、全教員がリモート授業を準備し、その充実を図る。 ・「指導と評価の一体化」ができるように、継続的に評価の方法などについて、教科や学力向上委員会などで検討する。 ・観点別評価(ABC)と評定の関係について、生徒・保護者等に対してより理解がすすむ説明方法に改善していく必要がある。	
	みらいチャレ ンジ活動の充 実・発展	・1年次後半から取り組めるよう年間スケジュールを作成し、グループ活動を中心に他者と意欲的に意見交換するなど、成果を上げた。 ・2年次生での夏季休業中に事業所訪問、大学研究室訪問を通じて課題を明確にし、2学期の探究活動につなげた。 ・2年次生のマニュアル『課題研究メソッド』がやや難解だった。 ・教員の中に自主的なみらいチャレンジ活動充実に向けての研修グループなどもできた。 ・3年次生では進路志望別に活動し、志望の確認につながるなど成果を上げた。	・地域の資源を活用した多様な教育活動とおして、主体的に活動できる力が身につく。 ・2年次生の学習前と学習後の自己評価の肯定的変化が80%を超える。	・2年次では地域にでかける機会を確保するため授業変更を行い、半日程度校外に出やすい日を作る。 ・ハイレベル講座(県教委事業)を継続し、プレゼンの効果的な発表方法の習得を図る。 ・事業所訪問等の経験を通し、課題解決学習を深堀りするよう担当教員との連携を密にする。 ・『課題研究メソッド』の改善を進める。	・フィールドワークや、大学訪問、米子市のイベントに参加するなど地域に目を向け、意見交換を行う機会が増えるなど、他者と協働的に取り組み、他者理解が深まった。 ・2年次生のフィールドワークでは、地域の現状にふれたり、市民との交流をはかったりする等、よい機会となった。 ・企画推進部のアンケートでは、2年次生の学習前と学習後の自己評価の肯定的変化は、72.6%で目標を下回った。 ・夏季休業中に事業所訪問、大学研究室訪問を通じて課題を明確にし、2学期の探究活動につなげた。 ・校内発表会後も探究活動活動を継続する等、積極的に活動する場面が見られた。	B	・1年次生のブレ探究では、副担任の関わり方、生徒への指導のポイントの共有方法など整理する。 ・ハイレベル講座を継続し、プレゼン力を向上させるとともに、効果的な発表方法の習得を図るために、発表会場を校外に設定する。 ・事業所訪問等の経験を通し、課題解決学習を深堀するよう担当教員との打ち合わせを行い、生徒の自主性を引き出す活動につなげる。 ・探究活動の教材を見直し、適切な検証活動につながるよう指導を工夫する。	
	進路指導の充 実	・国公立大学総合型・学校推薦型選抜の合格者21名。 ・国公立大学現役合格者数が、61名・難関私立大学現役合格者17名であり、目標を達成できた。 ・総合型・学校推薦型入試の取り組みについて、教員間の意思統一が不十分だった。	・国公立大学現役合格者60名 ・難関私立大学現役合格20名	・小論文指導・面接指導は現行体制を維持し、進路ガイダンスは同様な形式で実施する。 ・本人にどの入試方法が向いているのかをよく見極めさせ、安易な受験方法にならないように指導していく。 ・企画推進部と進路指導部・学年団が連携を深めてプレゼンテーションやグループディスカッションに取り組めるようにする。	・3年担任は、担任会や進路調整会で研鑽を深め、面談を通して進路指導に役立てた。 ・大学入学共通テストの出願率は72.1%(昨年57.2%)となり、高校3年間の学びの成果を図ることにつなげてくれた。 ・国公立大学現役合格者77名、難関私立大学現役合格28名で、目標を達成した(3月22日現在)。 ・3年次生総合的な探究の時間の年間計画の見直しを図り、進路指導部と企画推進部が連携して志望理由書作成指導を効果的に進められた。	・2年担任と進路指導部は、引き続き様々な入試方法を見据え、個々の生徒に合った進路設計を考え、保護者懇談に活かすとともに、大学受験に関する進路LHRを設定し、意識の高揚を図る。 ・3年担任と進路指導部は、放課後講習の時期や科目を変更し、見直しを図る。また、小論文講習会と志望理由書の作成について指導の時期を見直し、より生徒の指導に役立つよう改善する。	A	
	学習習慣の定 着	・6→9月の家庭学習時間調査の結果は、1年次97.5→114.6分、2年次120.5→142.2分、3年次127.3→141.2分であった。 ・成績不振生徒(のべ47名)へ、教科面談シートを使って面談を行った。 ・学習記録表の集計をもとに、保護者懇談等で客観的な数値に基づき指導でき、学習習慣確立の一助となった。 ・感染症等の出席停止等によりリズムがつかめない生徒もいた。	・「学習記録」を実施し、学習習慣定着に役立たせる教員の指導が容易に行えるようになる。	・課題を課すことだけでなく、生徒が自主的に学習できるような声掛けや働きかけを、学校全体として取り組んでいく。 ・学習記録などをもとに生徒面談を行い、個々の生徒に合わせた学習指導、進路指導を行う。 ・学習時間調査は手書きとフォームとの併用を実施する。 ・日常的に学習に対する強い動機付けを行っていく。	・3学年とも「学習記録」の記入が定着し、生徒の学習実態の把握や進路指導・保護者懇談に役立てられた。 ・自分自身での創意工夫ができない生徒に対しては、たくさんの具体的な示唆を与えることにより、生活や学習のヒントをつかませており、これらの取組が自主性を促す第一歩となっている。 ・6月から9月の学習時間調査では、1日あたり、1年：92分→88分、2年：92分→96分、3年：150分→229分となり、1、2年次生に課題が見られた。	・学習活動、定期考査、模試などにおける変化、良くなった点を認めながら、classroomでの生活・学習調査を上手く活用し、意欲的に学習する生徒を増やしていく。 ・学年集会等を通じて、学習に対する動機付けを行っていく。 ・生徒が主体的に学習を行えるように、授業と家庭学習の関係について検討したり、chromebookなどを利用して学習できるような手だてなどを考えていく。	C	
2 他者を認 め、人とな がる力の育 成	基本的生活習 慣の確立	・年間1回までの遅刻回数の生徒は全校で85%であった。 ・挨拶やルールを遵守するなどの基本的な生活習慣が確立している生徒は多く、清掃活動等については概ね良好である。 ・スマホ依存・ゲーム依存の生徒で学習と生活に支障をきたす生徒もいる。 ・自己肯定感の高まりを感じる生徒は68%であった。 ・いじめアンケートを年に2回実施している。	・年間の遅刻回数が1回以下の生徒の割合が90%以上。 ・自己肯定感の高まりを感じる生徒が80%。 ・いじめを早期発見し、いじめの解消に努めている。	・スマホの使用に関し、生活アンケートを通して使用における意識づけにする。 ・学校生活を送る上で基本的な生活習慣の大切さを意識させ、様々な場面において自主的に行動できるように働きかける。 ・いじめの早期発見に努め、組織的に対応する。	・生活アンケートを実施し、スマホ等メディアの使用状況をまとめ、課題を意識する機会を持つことができた。 ・基本的な生活習慣は、ほとんどの生徒が確立しているが、人間関係の問題は非常に難しく、SNS上でのやり取りに関して対策講じる必要がある。 ・1月23日現在、遅刻回数が1回以下の生徒の割合が96.7%で目標を上回った。 ・学校評価アンケートから、自己肯定感の高まりを感じる生徒は75.7%で目標を下回った。 ・いじめアンケートを6月と9月に行い早期発見に努めた。 ・ヘルメット着用について登校時学校周辺での着用率は高いが、下校時での家庭周辺の着用率は低い。	B	・インターネットを介する諸問題への対策をこれまでより重点的に行う。 ・基本的な生活習慣の確立について、さらに自主に関わる態度を養うように、機会を捉えて意識づけを行う。 ・いじめに関して、現在の指導を継続しながら「未然防止」の観点から職員同士の情報共有と事後には組織的対応を素早く行う。 ・スカート、スカート下のズボン、ヘルメット着用は粘り強く指導する。 ・行事におけるスマホの使用可否について、初年度は適正な使用ができていたが、今後も動向を注視していく必要がある。	
	部活動の奨励	・運動部全国・中国大会以上21競技、文化部全国大会6部門出場。 ・1年次生は、積極的に部活動に励んでいる生徒が多く見られた一方、早い段階で退部した生徒が多かった。 ・全体として、コロナの影響もあり十分な活動ができなかった。 ・学業との両立ができていないような生徒も見受けられる。	・運動部全国・中国大会20競技以上、文化部全国大会5部門以上出場 ・人前で発表する経験が得られる。 ・学校外のコンテスト等への応募者、参加者を増やす。	・部活動が継続して実施できるよう支援する。 ・各部署が連携して、学業と部活動の両立できない生徒の把握と指導に努める。 ・感染症対策を徹底し、効率よく意欲的な活動ができるように計画を立てる。	・運動部が全国・中国大会以上31競技(内部活動外7)、文化部全国大会6部門出場となり、目標を達成した。 ・部活動については、各部とも概ね元気に活動している。	・部活動奨励の目標「運動部が全国・中国大会以上20競技、文化部全国大会5部門出場」の再検討が必要である。 ・各部署が連携して学業と部活動の両立できない生徒の把握と指導に努める。	A	
	外部講師の活 用	・卒業生や、社会人の講話から、将来を具体的に考えることができたり、人権教育講演会で人権学習を充実させることができた。 ・社会人講話では、7月に11名の講師で開催した。 ・コミュニケーショントレーニング、ストレスマネジメントや性に関する指導講演会を実施し、自分自身を振り返る機会を得た。	・外部講師から多様な考え方や生き方、最先端の技術等を学ぶことで、社会の一員となる意識が身についたと回答する生徒が70%以上いる。	・大学生の講師数を増やし、大学の学びについて情報を得る機会を作る。 ・講演の目的(ねらい)について、教職員等の共通理解を一層進め、講演後の学習や指導の充実を図る。	・キャリア教育講演会、卒業生講話や人権教育講演会を通じ、進路意識や人権意識が高められた。 ・経済同友会西部地区と連携した講演会を実現し、生徒が主体性や自分の人生について考える機会となった。 ・企画推進部のアンケートで、社会の一員となる意識が身についたと回答した生徒は、98.8%で目標を上回った。 ・コミュニケーショントレーニング、ストレスマネジメントや性に関する指導講演会では、自らを振り返って他者理解を深め、人との関わり方を学ぶ機会を得た。	・外部人材と連携した講演会等の取組を継続して行うとともにその充実を図り、学びの環境を整える。 ・社会人講話では、講話を依頼する職種について来年度も生徒の実態に合わせて決定し、キャリアプランを立てる好機となるよう工夫する。 ・生徒の現状に応じて、必要な時期と適切な内容を検討し、指導計画を作成する。アンケートで生徒の振り返りの様子を検証しながら、全体の指導に活かせるようにする。	A	
3 地域を知 り、地域に参 画、寄与しよ うとする力の 育成	地域資源を活 用した教育活 動の推進	・探究学習で、職場や大学に直接出向くなど、イベントを企画、運営して効果を上げた。 ・2年探究において、米子市役所職員のサポートを受けて探究活動を進めることができた。また、事業所訪問として、多くのグループが米子市役所を訪問するなど、連携を深めた。	・みらいチャレンジ活動において、年間5回以上の連携を米子市と図り、生徒の地域理解が深まる。	・1年次の探究活動においても米子市と連携し、探究活動の充実を図る。 ・今後もさらに地域の事業への参加の呼びかけを実施し、学校以外での出会いや学びの場を増やす。	・2年次生の探究において、米子市職員のサポートを受けて探究活動を進めることができた。特に、事業所訪問で多くのグループが米子市役所を訪問するなど、連携を深められた。 ・校外のイベントへの参加や米子市各課との連携など、積極的に行動した生徒が多かった。結果、米子市の広報活動に採用されたり、「歩いて楽しいまちづくりシンポジウム」での発表、また「yonago まちなかハイスクール」への多数の参加もあり主体的な学びにつながった。	A	・1年次の探究活動においても、米子市との連携を図り、更に探究活動の充実を図る。 ・今後もさらに地域の事業(ボランティア、ワークショップ、講演会等)への参加の呼びかけを行っていく、学校以外での出会いや学びの場を提供していく。 ・国際交流などの機会を通して、他国の生徒との意見交換等により、探究活動の一層の充実を図る。	
	学校の魅力・ 特色の情報発 信	・ホームページの更新及び動画掲載が少なく、学校のアピールが少なかった。	・情報発信の強化、特に生徒の声や活動を発信している。	・「翠嶽く」など、学校行事を録画配信できるようにする。 ・部活動の成績や大会報告を積極的にホームページに掲載する。	・学校行事の録画配信はできなかったものの、学校紹介の動画を配信出来た。 ・ホームページでは、4月以降1月末現在で121回更新(昨年33回)する等、積極的に記事を配信出来た。	・「学校行事の広報活動について、放送部や写真部などの協力を得て充実を図ることを検討する。 ・ホームページにおいて、部活動の成績や大会報告は一部の部活動に留まった。顧問にホームページ活用を呼び掛け、入力を促していく。	B	
4 働き方改 革の推進	時間外業務時 間の削減	・A I採点を取り入れて業務を軽減し、採点後の授業充実に成果を上げている。 ・時間外勤務超過者は減少してきているが、部活動に由来する超過勤務者が固定化されている。	・時間外業務時間月45時間、年間360時間を超える勤務者の解消。	・A I採点を効果的に活用していく。 ・月に時間外勤務が30時間を超えることがない部活動計画の提出と実践を求める。 ・行事、会議の精選によって業務の効率化を図る。	・A I採点は時間外業務削減に効果があった。 ・衛生委員会では時間外業務削減のアンケートを行い、その結果にもとづいて改善の取組や意識改革につなげた。 ・時間外業務時間月45時間、年間360時間を超える勤務者解消の目標は達成できなかった。時間外業務の上位は、部活動指導54.4%、教科業務15.0%、分掌業務12.0%、教材研究9.1%、担任業務5.3%となっている現状がある。	C	・「人員、仕事量が変わらないまま時間外勤務を減らすことは、学校全体の質を下げることになる」という意見もあるが、業務の優先順位を意識し、効率よく、時機を得た業務遂行を心がけることが必要であり、そのために事前の打合せを徹底し、見直しをもった業務の遂行を図っていく。 ・衛生委員会を中心に、引き続き、業務改善の議論を行って改善の実現を目指す。	
評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し 【100%】 【80%程度】 【60%程度】 【40%程度】 【30%以下】								